

最優秀賞

アニメの肖像

ゆきかわゆう

5

優秀賞

児島の梅

鷺見京子

45

優秀賞

ももちゃん

須田地央

89

〔選評〕小川洋子・平松洋子・松浦寿輝

129

内田百閒

136

岡山県「内田百閒文学賞」

138

《最優秀賞》

アニマの肖像

ゆきかわゆう

〈著者略歴〉

ゆきかわ ゆう

平成六年 京都府生 東京都在住

現 職・公務員

わたしの身体の中には幾つもの意識が川のように流れています。それらは形を与えられないことを求めている、時間の中で静かにうずくまっています。ある時は童子が丈比べにつけた傷が意味を持ってわたしの身体から分離していくこともあれば、僧が刻み込んだ経文が独立した価値をもって遠い向こう側を目指して行くこともありました。

とりわけ印象深かったのは一人の少年が生み出した一匹のねずみでした。そのねずみはかつて感じたことのないほどの情念でわたしの中に留まり、消えていきました。少年への強い思いがねずみを生かし続けたのです。

それは応永から正長へと元号が変わり始めた頃でした。京では足利将軍が栄華を極め、文化の花が開いた一方で、上杉氏が反乱を起こし、伊豆大島では火山が火を噴き上げて、世間にやや不穏な空気が漂い始めていた頃でした。しかし遠く離れたここ西国備中の地ではそれらの出来事は遙か異国の出来事のようにでした。

ある日、一人の少年が寺に入門してきました。少年は自分の身長は何倍もある山門を見上げ、拳を握りしめたままちょこんと立ち尽くしていました。その姿がなんとも愛らしかったのをわたしは覚えています。

彼は物覚えがよく聡明な少年でした。彼と同じ時期に入門してきた童子たちと比べても、その違いは明らかでした。彼は一度読んだ経文はすぐに記憶し、幼いながらその内容をよく理解しました。同じ年ごろの童子にはまだ読み書きすらままならぬ者もいる中で、少年の才は抜きん出たものでした。

しかし、仏道修行に励む勤勉な少年だったかというと必ずしもそうではありません。鳥が鳴くと説法をよそにその鳴き声に耳を澄まし、桜の花弁が舞い落ちるのを見ると、経文を放り出して門をくぐり抜けてしまうのでした。彼の体は移り変わる外界の刺激に敏感で、心よりも先に体が反応してしまふのでした。

彼はいつも筆と和紙を手にしていました。そして目の前で起こる一瞬一瞬をまるで永遠に留め置きたいとばかりに一心不乱に書き写しました。それは見事なものでした。彼の筆は景色に流れる生命を間違ひなく写し取っていました。

年長の僧たちは、少年の描いた絵を見て目を見開かんばかりに驚きました。彼の筆の中

には、普段読む経文の一字一句にも等しい何かがあることは火を見るよりも明らかでした。しかし写経の途中で門の外に出たこと、ましてや貴重な和紙に絵を描きつけたことを年長の僧たちはひどく叱りつけました。彼らは叱りつけることで、自分たちの威厳を保とうとしたのでした。彼は僧たちに叱られる度、涙を流して謝りました。しかし幾度怒られても決して筆を止めることはありませんでした。彼の瞳の奥にはどんな僧をも凌駕する生命力が、夏の大樹のように生い茂っていました。それを止めることは誰にも、少年にさえもできなかったでしょう。

ある日、朝のお勤めが終わったあと、少年は御堂に来るように和尚に呼びつけられました。

「君は絵を描くそうだね」和尚は訊ねました。少年はどきりと思いました。自分が絵を描くことをまさか和尚が知っているはずないと思っていたからです。いえそもそも門弟を多く抱えるこの寺院で、自分のような年端もゆかぬ小僧のことを知っていること自体が驚きなものでした。

「君、年の頃はいくつかね」和尚の問いに少年は答えました。

「そうか。まだ十そこそこではやっと分別がつくようになってきた頃合いであろうね」

そう言うと和尚は胸元をややまさぐり、衣の下に挟んでいたのか一枚の和紙を取り出ししました。そこには川のほとりで水を飲む美しい鳥の絵が書かれていました。少年はあつ、と声を漏らしました。

「これは君が描いたのかね？」それは間違いなく少年が描いたものでした。先日写経の途中で用を足しにと偽って抜け出し、裏山で写生したものでした。戻ってきた少年は世話役の僧にこっぴどく叱られ絵も筆も取り上げられてしまったのですが、なぜかその絵を和尚は持っているのです。あの時の僧が和尚に報告したのだ、少年はやや遅れてその事実に気づきました。和尚は日ごろの自分の素行を叱るために呼び出したのだ。

「問いに答えなさい」和尚は静かに言いました。少年は観念しゆつくりとうなずきました。すると和尚は意外にも顔をほころばせました。

「……そうか、素晴らしい絵だ」和尚は和紙をぴんと張って今一度少年の描いた絵をまじまじと見つめました。

「君の絵はここに居る凡百ほんびやくの阿闍梨あじやりどもよりもよくこの世界の理を説いている。流線の一つ一つには生の充実があり、部分は全体に奉仕しておらず、部分それぞれ自体が全体であるような、命の躍動がある。やや筋に荒いところがあるが、絵の中に自律した世界がある。

君から生まれ、君自身を超えていくような力をこの絵は持っている」和尚は慈悲に満ちた優しい声で言いました。叱られるとばかり思っていた少年は驚きました。そして目を輝かせ、和尚の次の言葉を待ちました。きつとお褒めの言葉が続くに違いない。少年は期待しました。しかしその期待は崩れました。

「しかし君はまだ若い。あまりにも若すぎる。君自身はまだ何者でもない。自分の足で立つことはおろか、自分が何を考えているのかすら明瞭ではない。牙を持った獣が霧の中を暗中模索し、手当たり次第に獲物を捕まえているのと同じだ。力の横溢はいつか君自身を噛み殺してしまう。今はまだ時期が早い。可哀そうだとは思いますが、恨んではいけないよ」和尚がそう言うのと年長の僧たちが四、五人バタバタと音を立てて御堂に入り少年を拘束しました。そして縄を持った一人の僧侶が少年を柱に縛りつけてしまいました。その間少年は声を上げることができませんでした。

「君には絵を止めてもらおう。これは君の将来を思っていることだ。君の絵は君の人生にとつて危険すぎる。松の樹は天へと枝を伸ばす前に、地中奥深くに根を張る。うまく根を張ることのできなかった松は、いつか成長していく自分自身を支えることができず、倒れ、枯れてしまう。まずは大人しく経文を学びなさい。絵を描くのはそれからのことだ」

和尚はそう言うど手に持った少年の絵を表情一つ変えることなく破り捨てました。そして紫の袈裟を床に擦りながら言葉なくその場を後にしました。僧たちも和尚の後ろに続いて再び床を踏み鳴らし、御堂の扉を閉めて去っていきました。少年が声を出すと間もなく視界は真っ暗になりました。外からは門かんぬきを差す音がやけに大きく聞こえてきました。少年は真っ暗な御堂の中に完全に閉じ込められてしまったのでした。

少年はしくしくと涙を流しました。右を見ても左を見ても一面の闇で、世界は一切閉ざされてしまいました。

どうしてこんな目にあうのだろう。ただ絵を描いていただけなのに。

十歳ばかりの少年は自分の中に沸き上がってくる取り留めのない感情に流されるままでした。幼い彼にはまだ感情を律する力はありませんでした。彼は泣いて泣いて泣きましました。彼の有り余るような力は泣くという形で消費されるしかなかったのです。

少年はたった一人でした。閉鎖された御堂の中でたった一人でした。目を開けていても自分と茫漠たる闇との間の距離が掴めず、自分がどこに居るのか次第にわからなくなっていきました。広大な海に漂うように意識が闇の中をさまよって、世界には自分一人しか存在しませんでした。身じろぎする度に縄が体にぎゅっと食い込んで、痛みを感じます。し

かしその痛みだけが、彼と世界とを辛うじて繋ぎ止めているのです。

少年は和尚に怒られたことよりも、この世界でたった一人だという孤独感に今や打ちのめされていました。少年は再び涙を流しました。それは先ほどまでの涙とは全く異なる涙でした。そしてその涙は一つの生命を生み出しました。

夜になって和尚が御堂にやって来ると少年は眠りについていました。疲れ切って寝たのだなと思っていると、足もとに何やら怪しげな者がおりました。それは鼠でした。一匹の鼠が少年の足もとでうずくまっていたのです。もしや、鼠に噛まれ少年は何か致命的な病を負ったのではないか、和尚は驚き少年に駆け寄りました。しかしそこで和尚は気づきました。鼠は鼠ではなかったのです。それは鼠の絵でした。水のようなもので御堂の床に描きつけられた鼠の絵だったのです。しかし御堂の中には水気のあるものなどありません。不思議に思っただけで和尚が少年の顔を見ると、彼の顔が濡れていました。そしてそれが少年の涙で描かれたものだということにようやく気づきました。

和尚はえもいわれぬ感情に襲われました。それは深い森の中で神にも等しい獣に出会った時に感じる畏怖の感情でした。和尚は少年の縄を解いてやりました。そして阿闍梨たちを呼ぶと少年を運ばせました。少年はその夜、食事も取らずにずっと眠りについていまし

た。翌朝起きた時、少年の枕元には筆と和紙が置かれていました。

それからいくつか季節が巡った後、少年は寺を出ていきました。彼は京のある高名な寺社へと移って行ったのでした。

少年が出ていった後、ねずみは一人ぼっちになりました。

その日、ねずみは不思議に思いました。聞き慣れた少年の声がなくなったからです。普段なら朝のお勤めの後、少年がやってきて、昨日あった出来事をあれこれと語るのです。美しい朝日に包まれて少年がほがらかに笑うのです。そんな少年の姿を見ることがねずみの一番の喜びでした。

しかしそんな少年の声が突然聞こえなくなったのです。初めのうちねずみは自分が一人になったことがわかりませんでした。今日は少年が話に來ないなど、その程度に思っていたのです。翌日も少年は來ませんでした。もしかすると少年は風邪を引いてしまったのかもしれない。ねずみは少年のことが心配になりました。三日、四日待てど暮らせどやってきません。五日、六日足音すら聞こえてきません。七日目にして、阿闍梨たちが少年の話をしているのを聞きました。

京から文が届いた、どうやら滞りなく着いたようだ、随分叱ったものだがあれはあれで立派な僧になるのだろう。我々が彼より長じているのはただ齢よわばかりかもしれない。

その時になって初めて、少年が京に行ってしまったのだということをねずみは知りました。しかしねずみは信じませんでした。最後に会った日だって、いつも通り、写経は退屈だとか、墨が衣についたから洗わなくてはいけないとか、そんな取り留めもない話をしてきた。それなのに急に去って行くことなんてあるわけが無い。

ねずみにはわからないのです。幼い少年にとつて、しばしば別離を切り出すことが難しいのだということ、さびしさを残していくことが難しいのだということが、わからないのです。少年はいつか戻ってくるのだろうとねずみは思っていました。

でも一週間経っても、二週間経っても少年は戻ってきませんでした。

南風とともに暖かい気団が冷たい気団を押し上げて、日本列島を覆っていきました。気団が動くたびに、その圧力でくちなしの蕾がぱつと開いて辺りに甘い匂いをまき散らしました。

それはじんわりと暖かい雨の降る日のことでした。空気中の微細な粒子が雨と結びついて御堂の中はしっとりとした埃の臭いがします。ねずみが一人で思索していると、何か

御堂の中に入ってくる物音がしました。それは僧たちの足音ではありませんでした。何かもっと小さなやわらかい音でした。

それは一匹のクマネズミでした。クマネズミは傘のようにして蓮の葉を肩に斜めにかけていました。垂れた葉先からぽとぽとと雫が御堂の床に落ちました。クマネズミは床に腰を落とすと、ふうと一息つきました。

「やあ、あんた」

突然声をかけられてねずみは驚きました。自分に言葉をかける存在はそれまで少年しかおらず、少年がいなくなった今やもうそんなことは起こりえないと思っていたからです。

「ちよつと雨宿りさせてもらうよ」クマネズミは床の上で尻尾を巻きました。

ねずみは返事をしませんでした。クマネズミは不思議そうな顔をしました。

「あれ、あんた、おいらの言葉がわからないのかい？ 弱ったな……」そう言つてクマネズミは、床に描かれたねずみのことをまじまじと見つめました。

「どうして、わたしのことがわかるのですか？」ねずみが訊ねました。今度は突然話しかけられたクマネズミのほうが驚いてバランスを崩し、尻もちをつきました。そしてカチカチと歯を鳴らして笑いました。

「なんだあんた話せるじゃないか」クマネズミは嬉しそうに尻尾を左右に振りました。

「わたしの体はあなたには見えないはずです。わたしの体を形作っていた水分はとっくの昔に蒸発してしまったのですから」そう、少年がわたしを御堂に描きつけたその夜に、わたしの身体は蒸発して消滅してしまっただけ。僧たちはおろか、少年にだってわたしの姿はもう見えないはずです。少年がわたしに話しかけてくれていたのは、描いた本人だから。そこにわたしが居ることを知っていたから、ねずみはそう思いました。

クマネズミはぼかんとした顔をし、すぐにチューチューと大きな声を立てて笑いしました。

「なんだそんなことか。それは人間を基準にした話だろう。おいらは鼠なんだぜ。鼠は人間と違って鼻が効くんだ。別に水が蒸発してようが、床に染みついた臭いは残ってるだけ。臭いを辿っておいらはあんたのことが見える。ましてやあんたの臭いは特別だ。人間の臭いが混ざってるんだから」クマネズミはねずみに近寄り、すんすんと鼻を鳴らししました。

「人間だ、人間の臭いだ。皮脂と産毛の混ざった臭いだ。でも嫌な臭いじゃない。あの少年のいい臭いがする」そう言ってクマネズミはねずみの周りをくるくると駆け回りまし

た。

ねずみは驚きました。どうして少年のことを知っているんだろう。ねずみは目の前の鼠に対して不信感を覚えました。そしてその馴れ馴れしい態度を不愉快に感じました。

「ところでだんな、庫裏はどちらのほうにあるか知ってるかい？」

「……渡り廊下を左に進んだ突き当りにあります」

「ありがとうございます」

クマネズミは尻尾を揺らして御堂を出ていくと、しばらくして小さな布に何かを一杯詰めて帰ってきました。そして得意げにそれを広げると、カラカラと音を立てて米粒が床一面に広がりました。その一つを拾い上げるとクマネズミは勢いよくかじりつきました。鋭い歯に米粒はガリガリと削れてゆき、白い粉が床にこぼれました。

「だんなも食べな。遠慮することはないぜ。なまくら坊主たちのものなんだから」そう言うときクマネズミはねずみの口の辺りに米粒をばら撒きました。

「わたしは要りません」ねずみは言いました。

「あら、どうして？」

「わたしは食べられないのです」ねずみの返答にクマネズミは不思議そうな顔をしまし

た。

「口がついてるのに?」

「入れるための身体がありませんから。わたしは絵ですから、肉がないのです」

「なるほど……。おいら勘違いしてたよ。おいらにはだんなの姿が見えるし、身体が見える。でもあんたには身体がないんだな」クマネズミは言いました。しかし言いながら自分の言っていることがよくわからないような顔をしました。クマネズミは自分の髭に手をあてて、一本一本伸ばしました。

「じゃああんたは何を食って生きているんだ?」クマネズミは首を傾げながら訊ねました。ねずみは不意の質問に考え込んでしまいました。

「わかりません。何も食わなくても生きていけるのです」それを聞いてクマネズミはますます不思議そうな顔をしました。

次第に御堂の中が暗くなってきました。日が落ち始めたのです。ただでさえ光が少ない御堂の中が真っ暗になっていくのはあつという間です。ここでは闇は忍び寄るといっても、膨らんでいくというイメージに近いかもしれません。すでにある闇がその体積を増していくのです。御堂の中心の辺りから壁に向かって闇が伸び、壁に押し返された闇が波の

ようにまた御堂の中心に戻ってきます。御堂の中には闇の濃淡ができて、何度か闇の海がうねったあとに均一な闇となって、静寂が訪れます。ねずみはこの時間が好きでした。姿の見えない闇が、一瞬だけ形をとってまた形を失っていくのです。この音のない静かな運動に耳を澄ます時間を愛していました。

しかし今やその時間はボリボリという下品な音にかき消されていました。クマネズミは無心に米にかじりついていました。それはまるで鋼を打つ職人のようなひたむきさでした。ただ食べることに没頭し、世界は自分と米だけだといわんばかりでした。そして腹が膨れたかと思うと、食べきれなかった米を布生地に詰め直しました。

「明日になったら帰ってくださいね」ねずみはぶつきらぼうに言いました。

「帰るってどこへ？」

「それはあなたの巣なりなんなりです。ここはあなたの住みかではないのですから」

「おいらに巣はないよ。この間の雨で流されちゃった」クマネズミはさらりと言いました。ねずみはその後何と続けてよいかわからず、黙ってしまいました。

「おいら、川の土手に生えている桜の樹の下に住んでたんだ。根っこの辺りがちようどいい洞になって、そこがおいらの家族の住みかだった。でも桜の樹ごと流されちゃっ

た」確かに先日、激しい雨が降っていました。大きな被害はなかったものの、いくつか雨漏りがあり、僧たちが柄杓で水を受けていたのを思い出しました。川沿いの村では荒れ狂う濁流に攫われた家屋もあったと聞きます。

「……それは、気の毒なことでしたね」ねずみは自分の不明を恥じました。

「気の毒？ 別に気の毒でもなんでもねえや。雨季になれば雨が降る。川が溢れる。土が流される。当然のことだ」クマネズミはあっけらかんと笑いました。クマネズミの声は湿り気を含んだ御堂の空気の中で意外なほどからつと響いて、そこに強がりの色も見えませんでした。かえってねずみのほうがどうしたらよいかわからないほどでした。

クマネズミは御堂の隙間から出て行きました。そしてすぐ戻ってきたかと思うと手に落ち葉を二枚持っていました。そして片方の落ち葉を床に敷き、その上に寝転がるともう一枚の落ち葉を自分の上に被せました。まるで人間が蒲団を敷いて寝る時のようでした。

「というわけで、おいらここに住むことにしたよ。雨風も防げるし、何より食料にも困らない。いいとこだ」そう言ってクマネズミは落ち葉の間にもぐりこみました。

ねずみが言葉を返す前に、クマネズミはすぐに寝息を立て始めました。ねずみにはこの不遜な鼠が御堂に住むのを止める手立てはありませんでした。平穏な日常が音を立てて崩

れていくのをねずみは聞きました。

そのクマネズミは鼠にしてはめずらしく、昼行性の鼠でした。毎朝太陽が昇ると何かの合図を受け取ったかのように突然むくりと起き上がり、三十分ほどぼーっとします。そして僧たちの床掃除の音が聞こえ始めると外に飛び出していき、日が落ちると泥だらけになって帰ってきました。

「おいら川辺に住んでたって言ったる。川はすぐに環境が変わる。だからおいらの一族は朝に起きる番と夜に起きる番がいて、交代で川を見張ってたんだ。おいらは朝に起きる番。えらいだろ」クマネズミは得意げでした。

御堂に帰ってくると、クマネズミはねずみにその日あったことを逐一話しました。

「おい、あんた猫って知ってるかい？ 化け物みたいな生き物だよ、おいらたち鼠のことを食いやがるんだ。ここに居る猫はみんな和尚の住んでる離れに居てな。あいつら、和尚の寢床で和尚の好物の甘味を守ってやがるんだ。甘味を拝借しようとかっそり和尚の部屋に忍びこんだら、危うくひっ捕らえられるところだったよ」クマネズミはぶつくさ文句を言っていました。ねずみは少年の絵で猫の姿を見たことはありませんが、実物を見